大学院生が見たパリ

東京農工大学 大見峻太郎 Shuntaro Omi

1 はじめに

私は現在、東京農工大大学院工学府に所属する博士後期課程学生であり、アンテナ工学の分野で研究を行っている。私は2016年1～3月の期間、大学の支援プログラムにより、現地の研究者との共同研究を目的としてフランスのパリに留学していた。このたび、本稿執筆の機会を頂いたので、短い期間ではあったが、私の留学体験を御紹介したいと思う。

2 留学のきっかけ・準備

まず、今回の留学のきっかけについてお話しさせて頂きたいと思う。実のところ、私は積極的に留学したいと思っていただけではなく、今回の留学は指導教員の勧めであった。留学に立つ8か月ほど前、東京農工大博士課程（後期）学生を対象とした海外派遣プログラムについて周知があり、指導教員からもこの機会を利用して一度海外留学をしてみることを勧められた。当時私は留学にそこまで積極的ではなかったが、大学の補助によって航空券代・現地での生活費などを賄えることや、留学経験がなかったこともあり、いい機会だと思って同プログラムへの応募を決意した。

応募の前に留学先・研究計画について検討し、私の指導教員と面識があり、私と同じ分野で最先端の研究を行っている教授のいる、フランス・パリのTelecom ParisTech大学への留学計画を立てた。その後、留学先の教授にメールで連絡し、研究内容について議論を行った。自分の研究内容と現地で行いたい研究についてプレゼンテーションした結果、良い理解が得られ、留学の許可を得ることができた。

そして、研究計画などを基に大学のプログラムへ応募し、採用を経て、私の3か月間のフランス・パリへの留学が決定した。

3 現地での滞在・研究活動

留学決定のおよそ半年後から3か月間、私はフランスのパリに滞在し、留学先の教授と共同して研究を行った。留学先の教授は到着の日に空港まで迎えに来てくれるなど非常に親切で、そのおかげもあって大きなトラブルもなくパリで生活を始めることができた。

現地では大学の寮に滞在していたが、寮はキッチン・

トイレが共同、部屋にはバスタブのないシャワールームのみといった感じであった。図1で分かるように、大学のキャンパスと寮が隣接しており、通学には非常に便利だった。

留学先の研究室では、日本と同じように席を用意してもらい、そこで研究に従事した。ミーティングは週に1回メンバー全員で行い、そこで研究の進捗状況などをプレゼンテーションした。研究室のメンバー構成は、大学院生が3名、ポスドクが3名と非常に少人数で、驚いたことにその全員がフランス国外からの留学生であった。国籍は中国・コロンビア・モロッコなどバリエーションに富んでおり、全員が英語・フランス語・母国語を話せるため、英語でコミュニケーションを取ることができた。また、大学や寮で会う研究室以外の大学生とも英語でコミュニケーションを取ることができ、フランスの大学生の英語力の高さには驚かされた。

研究室は土曜日、日曜日が休みであるため、土、日になると、パリ観光なども楽しむことができた。私は滞在中、美術館に行くことが多かった。ルーブルやオルセー、オランジュリー美術館など、名立たる美術館がパリ市内に集まっており、そこで名画を見ることができたのは貴重な経験であった。また、パリは街中の景色も美しく、建築物を眺めながら市内やセーヌ河畔（図2）を散歩するだけでも、気持ちのいいものだった。

ここで、パリでの食生活だが、外食は高いので（安

図1 大学キャンパス（赤）と寮（緑）
（画像・地図データ ©2018 Google）

くても10ユーロ以上はした)、平日は寮の自室で食べることが多かった。私は比較的短期の留学であったため本格的な自炊などはせず、スーパーマーケットで買った冷凍食品や電子レンジで調理できる簡単なものを食べていることが多かった。また、昼食は研究室のメンバーとともに学食で食べ、夜まで学食がやっていることもあったので、そのときにも利用したりした。

海外に滞在し、現地の食生活をしていると恋しくなるのが日本の味だが、パリでは日本食やアジア系のレストランが多く、更に日本食材を取り扱った店などもあり、カップラーメンなども簡単に手に入ったので、その点は不自由なく過ごすことができた。図3はパリで行ったラーメン屋のものだが、そこのラーメンは日本のものと比べても遜色なく、滞在中には何度か足を運んだ。

4 留学を通して気付いたこと、学んだこと

ここで、今回の留学を通して気付いた幾つかのことを書いておきたいと思う。

まず、パリの人々について。フランスやパリの人々について、愛想が良くないといった情報をインターネットなどで目にするのがあったため、多少不安ではあったが、いざ行ってみると親切な人が多いと感じた。確かに、日本と比べるとスーパーのレジやレストランなどで愛想が良くないように感じてしまうこともある。しかし、笑顔で親切な方が多く、大学や街中で親切な人に助けられることも多かった。大学の食堂で英語が通じずに困っていると、後ろに並んでいた学生が通訳をしてくれたこともあったし、駅の券売機で切符の買い方が分からずにいると、後ろにいたおばあさんが代わりにチケットを買ってくれたりした。

小さなことだが、こうして親切にされたことは、不安を感じることの多い留学生活では良い思い出になった。また、大学内やパリ市内には中国などのアジア系も含め（日本人が少ないのは寂しいところだが）多くの人種の人々がおり、アジア人として浮くこともなく生活することができた。

次に、研究室のミーティングでは学生と教授の間に活発な議論が行われていたことが印象的であった。研究に対する議論の上では、学生と教授は対等な立場で議論を行い、学生は自分の研究に責任感を持って取り組んでいた。そこには、教授に研究をやらされているのではなく、自らが自立して研究を行い、その成果について積極的に教授と議論していくという姿勢がうかがわれた。

こういった意識は、自分が研究を進めていく上でも大切にしていきたいと考えている。また、自らもそういった環境でプレゼンテーションや議論を行っていく中で、英語力や違う国の人々と臆せずにコミュニケーションが取れる自信のようなものを身に付けることができた。特に、自信が付いたことが非常に重要だったと考えており、留学後は、日本語の通じない海外の人々と以前ほど緊張せずに話せるようになった。

図2 セーヌ河畔

図3 パリで食べたラーメン

5 むすび

今回のパリ留学は3か月間という短いものだったが、得るものが非常に多かったと思う。特に、国籍の違う人々と英語で議論したりコミュニケーションを取ったことは、価値のある経験だった。グローバル化が当たり前になってきた昨今、短い期間ではあったが、留学でできた経験は自分にとって大きなプラスになったと確信している。

謝辞 このたびの留学は、東京農工大「博士課程（後期）学生を対象とした海外派遣」プログラムにより支援を受けたものである。同プログラムの関係者の方々に感謝申し上げる。

大見峻太郎（学生員）

2014 東京農工大・工・電気電子卒。
2016 同大学院工学府電気電子工学専攻
博士課程前期了。2018 年現在同学府電
子情報工学専攻博士課程後期に在籍中。
アンテナ測定に関する研究に従事。
IEEE 学生員。